



## ヴェニス商人の資本論

「貨幣共同体」の著者、岩井克人先生は、現代社会を経済的観点から分析する経済学者として有名である。平成22年度のセンター試験本試験にも採り上げられたし、最近の入試でも出題されている。

ちなみに、ご本人は教育大付属（現在の筑波大付属）から東大経済学部に進学し、マサチューセッツ工科大（MIT）の大学院で学んだあと、イェール大の経済学部助教授として教鞭をとり、その後日本に戻って東大の教授となった人である。

専門的な経済学の本から一般書まで幅広い著作をお持ちだが、その中でも多くの人から「面白い!」「岩井さんの本領発揮」「文章も素晴らしい」と高い評価を得ているのが、彼にとって最初の著作でもある『ヴェニス商人の資本論』（筑摩書房、1985、後にちくま学芸文庫、1992）である。現在は文庫本で読めるし、興味深い話題を読みやすく（易しくはないが）論じているので、経済学部などへの進学を考えている人は、ぜひ読んでみることを勧める（授業の際に配布した参考教材の「ホンモノのおカネの作り方」も収録されている）。

ついでに紹介すると、一年生の時に勉強した「マルジャーナの知恵」は、『二十一世紀の資本主義論』（2006）という本に収録されていて、これもちくま学芸文庫から出ている。岩井先生の一般書は、ほぼちくま学芸文庫に網羅されているので、はまった人は片っ端から読破できる。

\*

ところで、『ヴェニス商人の資本論』だが、そのタイトルとなっている「ヴェニスの

商人」はご存じだろうか？ いわずと知れたシェークスピアの戯曲である。なんでこの戯曲が岩井先生の本のタイトルとなっているのかは、実際に読んで探ってもらいたいわけだが、そもそも「ヴェニス商人」を知らなければ、せっかく読んでも面白さが理解できないだろう。あらすじを簡単に紹介すると、

ヴェニス商人＝アントーニオは、親友であるバッサーニオがポーシアに求婚するための資金を用立てようとしますが、財産の大半を外国との貿易の回していたので、手持ちのお金がありません。そこでユダヤ人の高利貸しシャイロックから借ります。その際、期日までに返済できなかつたら、シャイロックはアントーニオの体から肉一ポンドを切り取っていいという条件で契約を結びます。アントーニオのおかげもあって、バッサーニオはめでたくポーシアと結ばれます。当初は、貿易がうまくいって、何の問題もなく返済できると思っていたアントーニオですが、災難が重なって、返済ができない状態に陥ります。アントーニオは、肉一ポンドを削ぎ取られそうになりますが、男装して裁判官となったポーシアの機転に救われるーというあらすじです。（仲正昌樹『悪と全体主義』NHK新書、2018）

\*

ポーシアの「機転」が有名なのだが、知っている？ 知らない人は、ネットで調べてみよう。これくらいは日比谷生の常識である。

なお、ここに金利で儲ける悪役としてユダヤ人（シャイロック）が登場するところも興味深いのであるが、それはまた別の機会に。